

Case. 02

旭川実業高等学校では、進路学習・キャリア教育に河合塾の未来研究プログラムを2017年から取り入れています。

同校で行われていた3日間の冬合宿に、このプログラムを本格的に導入したのは2018年のことでした。導入から5年が経ち、生徒には次のような変化が現れたと鈴木先生は振り返ります。

- ・ 進路の選択肢を自らつくり、優先順位を決められるようになった
- ・ 進路のハンドルを生徒自身が握るようになった
- ・ 受験に向けて、生徒自らアクセルを踏み込んで自走できるようになった

実際にはどのような取り組みが行われてきたのでしょうか。

2020年以降に行われている「ミライの選択（意思決定・決め方を学ぶ）」(図①)では、“意思決定”に焦点を当て、進路選択を“科目の得意・不得意”で決めるのではなく、価値観や判断基準から深掘りしていきます。総合評価法を用いて進路を考え、選択肢について判断基準を明確にし、それぞれ重み付けをして順位をつけていきます。

鈴木先生によると、これまでの進路指導では受験情報や体験談の提供はしてきたものの、決め方を教えることはしてこなかったのだそう。

この新たな取り組みについて、生徒はどう受け止めているのでしょうか。

当時1年生だったNさんは進路選択に大いに迷っていました。そこで、選択肢として「医学」「正看護師」「薬学」「保健師」の4つを挙げ、判断基準を「結婚しても続けられるか」「夜勤の頻度」「資格の取りやすさ」「収入」とし、それぞれに重み付けをして総合点を算出しました(図②)。その結果、医学の点数が一番高くなり、今は血液内科の医師を目指して邁進しています。

このプログラムの結果は三者面談でも活用されています。



① ミライの選択

1年生 Nさんが作成した総合評価法

項目	医学	正看護師	薬学	保健師
総合点	4.0	3.0	4.0	2.0
順位	1位	2位	3位	4位

② Nさんが作成した総合評価

「ミライの選択」の実施を担当した先生の声

教育研修を受けた後、パワーポイントとテキスト、指導の手引きを見て流れを確認しました。また、事前に担当することが決まっていた第一講に関しては頭の中で軽くリハーサルをして授業に臨みました。パワーポイントに詳細なセリフが書かれていたおかげで流れを逸脱せずにやり切れたと思います。良い意味で「ミライの選択」は高度すぎないため、上位クラス以外でも実践できるのではないかと考えています。

河合塾未来研究プログラム「ミライの選択」の紹介

文理選択や大学・学部選び、入試方式の選択など、高校生には多くの決断の機会があります。さらに卒業後の人生には、変化の激しい時代も相まって、より多様で複雑な決断が求められる場面が続きます。一方、河合塾のアンケート調査によれば、高校時代までに意思決定について学んだ生徒はわずか13%という結果に。検索すればあらゆる情報が得られる現代では、それらの情報を整理し、決断を行う能力こそが求められます。こうした状況の中で、自分自身で将来について深く考え、よりよい決断ができる生徒を育てるためのプログラムが、「ミライの選択」です。

進路選択前に
「意思決定」の方法
を学んだ人の割合

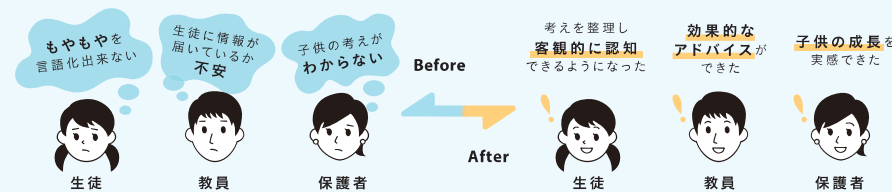


※河合塾 Kei-net 特派員（大学生）へのアンケート調査より

ミライの選択 6つのSECTION



ミライの選択導入前と導入後の変化



Speakers. 鈴木雅淑氏

旭川実業高等学校 総務部部長

1979年北海道北見市生まれ。2001年旭川実業高等学校の国語の教諭として勤務。昨年度まで進路指導部副部長として生徒の進路学習・キャリア教育に携わる。現在、難関選抜コース担任として指導に当たっている。



<https://youtu.be/7CF8twS9NN0>

